

---

# ホームレス達のいるところっ!!

カルタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ホームレス達のいるところ！－！

### 【Zコード】

N6241M

### 【作者名】

カルタ

### 【あらすじ】

関東のある森の中、今日も何かが起きてる！？

一トな主人公の人生は、個性的で愉快なホームレス達との出会いによって変わっていく。

笑いあり、笑いあり、最後に少しの涙ありの、ホームレス達の日常をじ堪能あれ！！

## 第一章(一) 遭遇 襲撃(前書き)

初投稿作品です。

上手く書けてるか心配ですが、どうぞ宜しくお願いします。

## 第一章(1) 遭遇 襲撃

月曜日の朝。

他の学生は、休日で残業したを感じつつ学校に行っている時間である。

春の陽気が暖かい日のそんな時間。駅からは遠く、周りには縁が目立つボロアパートの一室で……。

俺、木々乃遊は新発売のライトノベルを読み終えた。もちろん学校には行ってない。そして、こんなニートのような生活をしていても（事実ニートですが…）注意する親はもうこの世にいない。

ラノベを読み終え、やることが無くなつた。やること無いなら学校に行け、という声が聞こえてきそうだが気にしない。

何かないかと探していると、目の前に転がっている預金通帳に気がつく。ある事情で今年に入つてからかなり散財したため、預金残額が気になつた。目の前の通帳を手に取り、開いて中を見ようとしたところで、

ピーンポーン

家のチャイムが鳴つた。

暇じゃなければ居留守を使つているところだが、ちょうど暇だった俺は氣だるさを感じながらもドアを開けるために立ち上がる。ドアを開けるとそこには大家さんが立つている。不気味なほどの笑顔で。普段は無表情なんだが…。機嫌がいいのだろうか？

「金出せ」

…何の事が分からない。いきなり家に来てそれはないだろう。とりあえず首を傾げてみる。

「金出せ」

みぞおちへのパンチのオマケ付きだった。

その衝撃で思い出したは… 家賃を今年に入つてから、ずっと納入し忘れていたという事だつた。

……ヤバい。思い出した途端に笑顔が怖く感じる。しかもこの人、昔ヤンキーだったと聞いたことがあるよつな…。

でつ、でもしあうがないんだよ！一期連続で話題作が放送されたんだ！An〇e l b〇at sとか超〇磁砲とか！グッズに何万円もつき込むのは当たり前だ！

おつと、今は大家さんに言つても許してもらえなさそうな言い訳なんか考へている場合じやない。

早く家賃を払わなきや、この家から追い出せ「早く出せ。次は手加減しねえからな。」俺が殺される。田は、本氣だ。笑つたままだけど…。

財布の中身は、先日アニ〇イドで使い果たした。手に持つている通帳を確認する。

……絶望したあああああ！預金残額が〇だという現実に絶望したああああ！！

金は無い。あとは死刑執行を待つのみなんだが、さてどうしよう？

- 1：交渉…する余地があるとは思えない。
- 2：逃げ…られないだろう。
- 3：土下座でお願い…よし、これでいいこう。プライド、何それ、美味しいの？

「あと一ヶ月…」

「無理。今出せ。」

最後まで言わせてくれなかつた。だが、ここで諦める俺ではない！

「しつかり稼ぎ…」

「黙れ。次、口開いたら裂くぞ。」

発言権すら奪われた。…裂くつて人に使う言葉だけ？

…という訳で三時間後

ゲーム機やパソコン、家具などを没収され（なぜかラノベは無事だつた）、乱暴に家を追い出された俺は、とりあえず近所の公園に来ていた。

俺、おわた…（泣）

畜生！俺からゲーム・パソコン等を取り上げたらラノベ以外何が残るんだよ！というか実際ラノベ以外残んなかったよ！

…ラノベが残つただけマシか？ってそういう問題じやねえ！

それより飯はどうしよう。もちろん買う事は出来ない。

金が無い + インドア野郎 + 野宿 = 死。そんな公式が頭に浮かぶ。十六年。長じようで短い人生だった…。父さん、母さん。生んでくれてありがとう…今、逢いに行きま（以下略）

ハリして錯乱する」と一十分

ようやく落ち着いた俺は、これからどうするかを考えながら公園のベンチに座つていた。

すると…

「ねぇママ、なんでお兄ちゃんは学校行かないの？」

「見ちやダメ…！」

グサツ【起きのに102のダメージ】

いきなり大ダメージをくらつた。実際に言われるとかなりキツい言葉だ。

突然心に傷を負つた俺の前に…制服姿の女の子が現れた。なぜか公園の周りの森の中から。【脳内ではポケ〇ンのBGMが流れている】

街中の公園にしては、やけにエンカウント率が高い。

女の子をよく見てみると、黒髪ロングヘア、俺と同じ年くらい。

そして…可愛い！

でも、なぜか俺と同じ様な残念な子のにおいがする。

「あなた、今日は平日よ。学校は？」

「えつ」

笑顔で唐突に聞かれ、言葉に詰まる。そして、その笑顔が大家さんとかぶる。

「学校は？」

「いつ、言いにくい！仕方ない、」  
「は嘘でも「教えて？」つかな  
いで正直に言おう。

「サボり…ました…」

どうしても歯切れが悪くなる。

「なんでここにいるの？家は？」

また言いにくい事をつー今度こそ嘘を「教えて？」つかずに堂々  
と言おう。

「たつた今、無くなりました！」

…自信満々に言つた自分が恥ずかしい。何もここまで強気で言つ  
事もなかつただろう、と自分でも思つ。

「そう」

何のツッコミもなく、そいつは少し黙り、

「ぐほあ…！」

拳を構えて右ストレート。笑顔でみぞおちに叩き込んだ。

【13

## 2のダメージ】

今日はなぜか、みぞおちをよく狙われる日だ。

「いつ、いきなり何をするんだ！」

「サボリの現行犯で、拘束します！…」

「お前もここに居るってことはサボリだろ…」

「そんな些細なことは気にするな。」

「些細じゃねえよ！気にするよ！…」

「うるさいな。私はただ…」

「？」

「学校の外をブラブラしていただけだ！」

「それをサボリっていうんだよつ…！」

久しぶりに全力でツッコミを入れる。

「…………ひひひひひこ」とは、氣にするな

「ゆつ〇ニ！？」

やりとりが一段落した途端、やつは一瞬で俺の背後に回り込んだ。振り返るつとすると、後頭部に衝撃がはしり、意識が遠のいた。

あきのは田の前が真っ暗になった【

あの笑顔は一生忘れないだろ？

## 第一章(一) 遭遇 襲撃(後書き)

いかがでしたか?

面白いと感じてくださいたら嬉しいです!

## 第一章(2) 遠い日の記憶ー(前書き)

更新が不定期ですが、よろしくお願いしますー。  
ではでは、第2話の始まりでーす！  
今回は地の文ばかりですが、

## 第一章(2) 遠い日の記憶ー

後頭部にかすかな痛みを感じながら、意識を失った俺は夢を見た。それはとても懐かしく、忘れる事のできない悲しい記憶。

…小学三年生の夏。梅雨真っ盛りのあの日は、視界が霞むほどんどしゃ降りだつた。

今となつては一ノートな俺だが、その頃は友達も多かつたし、外でもよく遊んだ。普通の元気な男の子だつた。

俺の隣の席には、一年生の頃から同じクラスの女の子がいた。名前は…何だったかな？

もう忘れてしまつた。ふつ、昔の女の名前なんて…調子乗つてスンマセン。

…ともかく、そんなテンションが下がるよつた天氣の日、俺はその女の子と一緒に帰つていた。傘を忘れてしまつて、入れてもらつていたのだ。もちろん、わざと忘れたわけではない。…多分。

俺たちは他愛もない話をしながら歩いていた。何の変哲もない、ただただ平和で、幸せな日常を過ごしていた。

通学路を半分くらい歩いた所にある橋の上に両親が立つていた。傘を届けに来てくれたようだ。

もう少し女の子と話していたかつたので、傘を受け取つて、両親には先に帰つてもらつた。

行かせてしまつた…

親が横断歩道に差し掛かる。信号は青。右からは黒い車。スピードは…落ちない。

もう一度言つがこの日の天氣は、視界が霞むほどいの雨。音も雨の音しか聞こえない。

親たちは気付かない。話しながら歩いている。

## 気づけ！気づけ！

俺はそう念じながら、親を止めるために必死に叫び、全力で走った。雨が、俺と親を隔てる壁のように激しく打ち付ける。

……ああ、届かない。伸ばした手も、絞り出した声も。

目の前では、時がゆっくりと流れしていく。

響き渡るにぶい音。後ろから聞こえる女の子の叫び声。走り去る車。

その中で、俺だけが…ただ呆然と立ち尽くしていた。

気が付くと病院の中だった。気絶していたようだ。聞いた話だと、親は即死だったらしい。

一緒に帰っていた女の子は、かなりのショックを受けていたと聞いた。心の中で、謝り続けた。

遺産はすべて俺のものになった。何不自由ない暮らし。そこには、今までのような温もりはなかった。親が居て、友達が居る。そんな日常はどこかに行ってしまった。

学校には行かなかつた。

目の前で起きた事故を防げなかつたこと、友達にショックを与えてしまつたことに対する責任感。それは小学生には大きすぎる重圧だつた。耐えるので精一杯だつた。

…何もせずに五年がたつた

その頃には、テレビを見て笑うくらいの余裕ができていた。いまだ親戚以外との交流はない。

その日は遅くまで起きていた。24時〇テレビを見るために。

……今、「お前もう大丈夫だろ！」という声が聞こえた気がす

る。しかし俺にはまだ責……いや、本当だつて。本当にまだ辛……あ、もうわかつたよ！正直にいえばいいんだろつ！８０%惰性だよ！でもさ、不登校つて一定以上の時間がたつと恥ずかしくて人前に出ていけねえんだよ！

それはさておき、話を戻そう。その日は遅くまで起きていた。だいたい一時半頃、CMに入つたため、チャンネルを変えた。アニメのOPが流れていた。

好奇心に駆られて見始めた。内容は、ほのぼのとした学園もの。涙があふれた。地元の中学校にも、こんなに楽しい日常があるのだろうか？学校に行ってみようかと思った。しかし、羞恥心が勝り、高校生になつた今でも学校には行つていらない。

俺は今、アニメやラノベを通じて、失つてしまつた学校生活を味わつている。そしてこれからも……

綺麗な茜色の光が俺を包み込んでいく。

## 第一章(2) 遠い日の記憶ー(後書き)

地の文ばかりの遊くんの回想でした。ちょっと重かったですかね?  
他のキャラ達も、やつと次の回で出しますー。  
お楽しみにー。

## 第一章（3） 出会い 始まり

西口がまぶしい夕方。

俺は森の中（多分近所のだ）で意識を取り戻した。何か夢を見た気がするが……なんだつたかな？

まあいいや。とりあえず今までの状況を整理しよう。

大家さんみぞおちを殴られる？ 家を追い出される？ 女の子みぞおちを殴られる？ 女の子に後頭部を殴られる

…………嫌だな。泣いてないよ？

目から流れる汗をぬぐう。

それにしても、この森にこんな開けたトコあつたつけ？  
ざつと辺りを見渡してみる。そして俺が見たものは……

- 1・青テント
- 2・赤テント
- 3・虹テント

……なぜかテントしかない。しかも、

「虹テントなんてよく見つけたな！！」

思わず大声でツッコんでしまうほど鮮やかな七色。ホームセンターでも滅多にお目にかかるないだろ？

その声が聞こえたのか、テントから三人の人が出てきた。ちつこい女の子と、おどおどした女の子と、ボーッとした男の子だ。

「おー、起きたかー。」

「思つたより早う起きたな！」

「「クリツ」

三者三様の反応。悪いやつらではなさそうだし、これだけは聞いておかなければ。

「俺を殴りやがった女の子を知らないか？」

「「ん」」

間髪入れずにボーッとした男の子と小さな女の子が、もう一人の

女の子を指差した。それにしても仲間売るの早えな……

よし、あれだけ強かつたんだ。手加減は「じつ、じめんなさい……」

……許す！上田使いはズルいと思つ。

うーん。こんな子が人を殴るなんて考えられない。雰囲気は違うけど外見はこの子だしなあ……

なんて考へてると、

「いや～、謝るんはウチの方や。『正義感の強い風紀委員』の設定にしたテルを野放しにしたんはウチやし。」

「はい？ 設定？」

チビ娘が……

「今なんて言つた（怒）？」

「なにも言つてません。」

「こいつ……能力者か？」

こほんっ。関西弁の子が訳のわからん事を言い出した。

混乱しかけたところで、目立たなかつた男の子がフオローリーをしてくれる。

「とりあえず自己紹介と、輝の説明しない？」

「せやな。それじゃああんたからな。」

ビシツと俺を指差す。

「俺から？ まあいいけど……」

その場の流れで俺から自己紹介。

「俺の名前は木々乃遊。ヨタクで二ートな高校一年生。親は昔死んで一人暮らし中だつたんだけど、家はさつき無くなつた。」

……自己紹介つてこんなに悲しいものだつたつけ？

「「はははっ！ 普通だね～（笑）」

どこがだ！？

「ほな、次はウチやな。」

「その次は僕ねー。」

チビ……関西弁の女の子が自己紹介を始める。

「難波凜、16歳。関西弁で喋つてるけど、生まれも育ちも東京。

家と親の事情はおんなじや！将来の夢はメイクアップアーティスト。

よろしくな、コウー！」

あんまり直しくしたくないなあとか思つてると、次の自己紹介が

始まつた。

「久原仁、17歳。家はなくて、家族は行方不明。夢は絵師でー

す。よろしくねー」

……シシコミ所がある。「あれ？俺つて普通じゃね？」

とか思つてしまつた。

「いっは？」

一番謎の女の子が残つてゐる。

「きつ 黄田輝、16歳」

「はい、ようできたなー。」

輝は照れ屋なんだー。素だとあんな感じ。メイクして着替えると、雰囲気に合わせて性格が変わるんだー。

不思議過ぎるよつ！！

「仁がのんびり説明してる間にできたでー。」

「わつきは本当にスマセンでした。家や親の事情はみんなと同じで、夢は声優です。凛には音読みでテルと呼ばっています。」  
ナチュラルマイクだけでこんなに変わるのが……。

よし、とりあえず整理しよう！

- ・マイクさん志望の小さな工セ関西人、凛
- ・のんびりしてて絵師志望、仁
- ・照れ屋で性格不安定の声優志望、輝

…………わあお、俺を含めて変人だらけ！！

変人度は、俺>仁>凛 輝 といつたところか。

「今、失礼なこと考えてたでしょ？」」「

「滅相もございません。」

疑問形にするなら拳を固めないでほしい。

「まあええわ。本題に入る。家なし、親なしの状況はウチうりと同

じ。」「

「堂々と言えたもんじゃないけどな。

「あれ？公園で言つてましたよね？」

「一般論だ。俺は気にしない。」

「……」

あれ、なんか冷たい目で見られてる。何故だ……

「……続けるで？」

落ち込みつつも耳を傾ける。

「そろそろ話題無くなつてきて暇やから、ここに住めへん？タダとは言えへん。テントと食糧は提供する。」

【凜のスカウ○アタック。32%】

「テントと飯の代償が駄弁るだけって、軽すぎて怪しいんだが……」

「大丈夫。活動中にテルに襲われるから、決して軽くない……！」

「一気に重くなつた！？しかも原因はお前だろ！…！」

「テヘッ」

「キモいぞチビ。」

攻撃を予測してみぞおちをガード。そして、

「ぐはあ！」

顔面……だと…？とこりか、交渉中に武力行使ですか？

「とにかく駄弁るだけや！」

【76%】

駄弁るだけなら俺でもできる。駄弁るだけな……

「気を付けや、テル。」

「主犯はお前だ！！」

「あれ、仁まだおつたん？」

「……（泣）」

「いつらと居るのは楽しい。一緒に居るのも……悪くないのかも

な。

「わかった。これから宜しく……」

**【凜はユウのスカウトに成功した】**

あの事故以来、初めて友達らしい友達ができた。

## 第一章（3） 出会い 始まり（後書き）

投稿が遅くて本当にスイマセンでした。  
ついに仲間たちが登場です！！次回から活動開始するので、  
読んでいただけたら幸いです。

## 第一章（1）始まり 日常？

その日は雲一つ無い晴れ。

まどろみから抜け出し田を開けると、一面の緑。支給されたテン  
トの色だ。

昨日は本当に色々あつた。家を追い出され、数回殴られ、変人3  
人と遭遇。滅多に無い3コンボである。

昨日の出来事を思い出し、涙目になつていると、

「おはよー。よく眠れた?」

青テントの住人。絵師志望の仁<sup>じん</sup>が入ってきた。

「はい。朝御飯だよー。凜<sup>りん</sup>が作ってくれた。」

目の前に米、豚汁が出される。

「材料はどうしたんだ?」

ふと浮かんだ疑問をぶつけてみる。

「野菜は近所のオバチャンがくれる。肉と魚は…」

言いづらそうだ。何故だろう?

「…『狩人』モードの輝が取つてくる。」

便利だなつ！でも輝が可哀想じやね？一体、狩人モードつてどん  
な格好させてんだよ！

気になつて、朝御飯を食べ終えた俺は外に出る。目の前に居たのは…身の丈ほどの「ゴツツイ」を持つ赤テントの住人、輝がだつた。

「モ ハンか！！」

鼻歌を歌いながら肉を焼いている。ブルファ 「ゴカ何かだろ？」

「おう、おはようさん。どう？一年前作ったウチの自信作は！」

自信満々に聞いてきたのは虹テントの住人、凜だ。

「凄いけど…こちらの「スプレなんかとは比較出来ないほど凄い  
けど！」

「ありがとう！人として間違ひだつて言わんかったんはアンタだけや～！」

…今更「けど」の後が言えねえ。

「今日は何するのー？」

「仁の奴、いつから俺の横にっ！」

「うーん。ウチから新入りに教える事もう無いしな〜。」「無いの！まだ何も教えてもらつてないぞ！」

ビュンッ…カツ（木に刺さる音）

大声で叫んだ俺の顔を掠めて矢が飛んでいく。頬には赤い筋が一本。

「大声を出すな。殺られるぞ！」

「仁、喋り方変わつてね？まさかお前も…」「よく見ると傷あとらしきものが頬に一本…

「思い出させないで！かなり怖…」

ビュンッ カツ

2本になつた。今日の輝は昨日より危険度が倍増している。

「「凛早く戻せ！」」

「アカン。今日は食料調達やから」のまま。ユウ、ウチらは山菜集めな。

「注意事項は？」

「「輝に会うな。」」

…近所の森で命がけの山菜集め。敵はハンター。貴重な体験だ

(泣)

そして、10分後：

力ゴ（中）を支給され、再集合。

「よーし。皆集まつたな！では、解散！」

凛が勢いよく号令をかけた瞬間、

シユタタッ…ドサッ

輝は鶏肉を手に入れた！

今の輝は確実にハンターラクガだ。ラーヤン位なら1人で狩れるだろう。

その時、俺と仁の気持ちは1つだった。

「仁」「遊」「行くぞ！」

輝がいるのと逆方向に走る俺達。流れる冷や汗もそのままに…草むらに駆け込む。

・カサツ（草むらに入る音）  
ビュンッ…カツ

今度は頭上を掠めた。

「…チツ」

狙う気は満々のようだ。

『ここからはグロテスクな描写がありますので会話と簡単な説明のみでお楽しみ下さい』

「仁、このキノコは？」

「それはアオキコだよー。」

「何であるんだって危なあ…！」

【木々乃是 オキノコを手に入れた】

「大声を出すな。」

「ああ、すまない。気を付ける…」これは？

「それはっ、危ない！つと僕が危ない！！」

「お前は何がしたいんだ。つてカゴに刺さつとる…カゴガード

！」

「ナイスティフェンス。あとそのキノコは毒 ング茸だよー。はい 毒草。」

【木々乃是毒テン 茸を手に入れた】

「リアル 林…カゴガード…」

【ベー キャンプに戻ります。報酬が10%減りました。】

「ミスつてる…！…！」

【ベースキャ プに（以下略）

そして開始から6時間後…

「今日の成果は？」

「カゴ一杯ずつの山菜と、矢が5本（カゴに刺さった本数）、  
毒 ン2個です！」

毒

満身創痍、疲労困憊。右を見ながら凜に報告する俺と、視線の先には…

「鶏肉10個、ブル アンゴ1匹、その他の肉16個です。」

「死体の山。っていうかブルファン いるのかよー。」

「精肉して貯蔵庫へ。終わったら着替えろー。」

「イエス、マム！」

テンション高めなーどこの軍隊だよー。

「ハンター、ギル だ！」

「読心術までレベル10にしてる!? あと絶対違うよねー。」

「まだツッコむ体力があつたことが驚きだ…」

輝は普段はオドオドしてるが、基本スペックがかなり高いようだ。

まだピンピンしている。

「奴は、化け物か?」

精根気き果てた俺達はテントに戻る。

今日、仁と俺は友情を深め、また1つトラウマを増やしたのだった。

## 第一章（1）始まり 日常？（後書き）

どうも～カルタです。

今回は遊と愉快な仲間達の活動初日です！

これからもハイテンションなホームレスライフをお送りしていきたいと思います。

それではまたつ！

## 第一章（2） 兄を探して……森の中

疲れ果てた仁はテントに入つて、物思いにふけていた。

「ここに来てから…もう2年か…」

そう呟く彼の口調は、いつものノンビリした彼のものでは無かつた。只今絶賛キャラ崩壊中です。

そんな仁を睡魔が襲う。意識は暗闇へと落ちて行く……

主婦の母に、サラリーマンの父、そして小説家でオタクの兄が1人。それが彼の家族だった。性格は皆せっかち。当時中学2年生だった仁も、今とは正反対でせっかちだった。

持ち前の仕事の早さと行動力で、学校でもリーダー的な存在だった。

10月下旬。その日は夏が終わつたとは思えないほど暑かつた。

もうすぐ文化祭！いやほおう！

皆のテンションは日に日に上がっていく。

準備期間なので帰宅するのが遅くなつた。

今日は仁の誕生日。皆は家で待つてくれているだろう。

無意識に小走りになり、笑みがこぼれる仁。すぐに家に着いた。いや、家だつた建物に着いた。

仁が見たものは、明かりの無い家、ドアに貼られた差し押さえのテープ。

「なんだよ…なんなんだよ…これは！」

状況がわからないまま、何か無いかと家の周りをくまなく調べた。郵便受けの中から封筒を見つけた。父からだつた。

-仁へ

とりあえずそこを離れて隠れる。絶対に捕まるな。

後ろから怒鳴り声が聞こえてきた。

とりあえず従い、学校へと走る。西にある森に逃げ込み続きを読む。

・これを読んでいる頃、お前はさぞ驚いていることだろ？  
すまない。時間が無い。簡単に説明をすると、詐欺に引っ掛け  
て多額の借金を負ってしまった。暴力団に追われている。皆でいる  
と目立つからバラバラに逃げている。以上。

申し訳ないが頑張れ！

父より・

…『頑張れ！』じゃねえよ…これからどうしよう？

森の中を茫然とさまよう仁。

ふと視界が開ける。そこには…

「おっ、珍しいな」。こんなところに人が来るなんて。

「「クツ」

同じ年位の女の子が2人いた。こんな所で何をしているんだ？

「ここは一般人が来ることちやう。はよ帰り。」

「家は…無い。今日…無くなつた。」

見知らぬ人、しかも女の子に何を言つてるんだろう？

「…ハアア～」

何故か溜め息をつかれた。失礼な！

「あんたもか…」

「あんた…も？」

「せや。うちちら2人も家無いねん。」

「えつ…」

「名前は？」

「じつ仁。久原仁。」

「ウチは凛。じつちは輝。仁、ここに住めへんか？森で飯とつて、  
駄弁つて、楽しく！正直2人やと話題がのうなつてきたし…」

「でも…」

迷っていた。この子達と話して安心したのは確かだ。でも、別  
た家族はどうしよう？

その時、ずっと黙っていた輝が話しかけてきた。

「悩み事が、あるなら…話して…。力になる、から…」

「！？ テルが、はつきり喋った！」

「珍しいの？」

「輝は極度の照れ屋で、滅多に喋らないのだー！」

……説明を聞いて感動した。さつきの事を言ひのべ、一体どれだけの勇気が必要だったのだ？

「わかった。一緒に暮らす。でも、悩みはもう少し落ち着いてからにさせてくれ。」

「やつた～！」

俺は、ラノベ作家の兄を探すため、絵師を田指すこととした。そして、もう少し落ち着こうと思った。父の一の舞にならないようじうじうという誕生日も、悪くは無いな。じうして、僕の新しい生活が始まった。

## 第一章（2） 兄を探して……森の中（後書き）

またまた過去話です。  
矛盾点が多い話でスイマセン。マジメな話を書くの苦手なんですね。  
アドバイスを頂けると幸いです。  
以上カルタでした！

## 第一章 (3) 早起き 女装?

昨日の疲れを残したまま目が覚めた。まだ薄暗いから夜明け前だ  
わづ。

外に出ると……まさかの全員集合！？

「なんでこんな時間に起きてんの！？」

「うるさいっ！近所迷惑だ！！」

「……スマセン」

……輝に注意された。

「できたで。新設定『キレる十代』！！」

「近所迷惑を注意するとかどんだけ良識的なキレる十代なんだよ  
！あと、もつとまともな設定作れ！」

「うるさいっつてんだろ！」

「凛、輝を戻して。輝に怒られるのはグサツとくる……」

もうすでにノックダウン寸前だ。ハハッ、膝が笑ってらりあ。

「はいはい。わかつたから立ち直りや。」

凛は手早く元に戻してくれた。

「で、なんでこんな時間に全員起きてんの？」

「新設定の開発ができたからや。お披露目してた。」

「俺も起こせよっ！」

「忘れてたんや。しゃーないやろ。」

「仁に負けた（泣）」

「その発言は失礼過ぎない？」

「……ゴメン、遊」

「ひどいよ！凛はともかく輝まで…」

「仁が乙ったところで、一つ疑問が…」

「凛って輝にしかメイクしないよね。なんで自分や仁にしないの

？」

「なんで僕が出てくるの？」

「似合いそうだから。」

「せやな。特に理由無いし、仁とユウにせよってみよか。」

「なんで俺まで！？」

「「似合いそうだから。」」

…という訳で、輝以外はメイク開始！

「出来たー！鏡、オープン！」

鏡の中には、1人の女の子がいた。

「嘘だろ。これ、俺か？」

黒く短い髪はきれいに整えられ、目は死んでない！メイクの力、凄いぞ！服は近所の高校の制服だ。

「女装中は女言葉で！」

とりあえず無視。従う気は無い。他の奴が気になる。

仁は…いない？横には茶髪の女の子しか…つてこいつ仁か！？白

いワンピースを着て…

「うう…恥ずかしいよー」

涙目で弱音をはいている。

…似合い過ぎだ。

そして、凛は…

「「男装！？」」

活発そうな男の子になっていた。小さいのは変わらない。

「で、メイクしたけど…何するの？」

「しただけや。」

「ふざけんな！」

「冗談やんか～。自分で外見からどんな人か考えて、なりきつた状態で駄弁つてもらう。」

審判はテル。10点満点で採点してもらいまーす！

「ペコリッ」

「嫌だよ！恥ずかし…」

「優勝者は、今日の晩飯が焼き魚から、焼きブルファン丼になるで～。」

「「頑張ります！」」

人生初のブルフンゴ、メッチャ食べてみたい。  
まず10分のシンキングタイムが与えられた。  
制服だし、普通に女の子でいいよな。  
余った時間は女声の練習に費やした。

10分後：

「よっしゃー！ほな、15分のフリートーク始めるでー！」  
「あんた素だよな！」

「遊子ちゃん。今のは減点対象ですよー。」

さりげなくチクられた。

「じゃ、じゃあ自己紹介から始めよっか。」

なんとか女声で言い切る。

「木々乃遊子。元気な女子高生です！」

… メッチャ恥ずかしい（泣）

「私は久原仁美。庶民に憧れるお嬢様です。」

… これよりもシカ。男が自分をお嬢様つて… ウケる（笑）

「けいんでいうとムみたいな？ボソッ（コロズぞ遊子）」

「自重しなさい！あとボソッと物騒な事言わないで！」

「2人とも様になつとるなー。ウチは元気な小学生の男の子や。」

凛太郎

「「あんたほどじや無いわよ！」」

「いやほんまに。洒落にならんほど似合つとるから。」

「コクコクッ」

輝が目を輝かしているが喜べない。

「仁美、話題無い？」

「…私は世間知らずだから。」

設定を上手く利用して逃げやがった！

「なあなあ遊子姉ちゃん。」

1番めんどくさいのが声を掛けてきた。

「チツ、なあに？ 凜太郎君？」

「今舌打ちせえへんかつた？」  
耳の良い奴だ。

「してないよ。それより何？」

「オタクって何？」

早速答えにいく質問がきた。

「中学生になつてからね。」

「萌えとは？」

小学生…なんだよな？

「ググりなさい！」

「最後に、遊子（笑）にとつて、ギャルゲとは？」

想像しうる中で最低の質問キター——！

「心のオアシス…じゃなくて、（笑）を敬称のように使つちやダメ！」

反射的に正直に答「えてしまつた。

「……アナタ最悪ね。」

凛太郎の毒舌の矛先が仁美に向く。

「仁美姉ちや…」めんなさい。」

「理由無く謝るのやめてくれる！？」

「ごめんなさい（泣）」

「…仁美。アナタ最悪ね」

「子供にエロゲについての考えを述べたヒトに言われたく無いわ

よー」

カーンツ

「ここで試合終了の合図や～」

「切り替え早つ！！」

「輝さん、結果は？」

緊張の瞬間、「も祈つている。

「全員、アウト」

「ガ 使だつ！」

結局、今日は駄弁つて終わり、

ルファン「井はお預けとなつた。

## 第一章（3）早起き 女装？（後書き）

勢いでボツ話を投稿してしまったカルタです。  
今回は、女装男装です。挿絵がなくて申し訳ないです。  
いつか自分で描こうと思っています！

## 第一章 （4） 物語は「」から……（前書き）

久しぶりの前書きです。

前回の回想での悩みを解決しないで、もう次の回想です。  
至らぬ点も多いと思いますが、最後までお楽しみ下さい！

## 第一章 (4) 物語はここから……

日はすっかり暮れていた。

暗いテントの中で凛はテントで考え事をしていた。

『凛って輝にしかメイクしないよね、なんで?』

今日ユウに言われた言葉だ。

特に理由は無いと言つたが、輝にしかメイクしなかつたのは、輝の照れ屋な性格が似ていたからだ…あの子に…

虹テントから寝息が聞こえ始めた。

…物心ついた頃にはもう親は居なかつた。

ここはそういう子供達が集まる所、孤児院だ。この孤児院はA棟とC棟まであり、凛はA棟にいた。名字が無かつた凛は、関西弁を喋つたので、大阪の地名の難波と呼ばれていた。

この頃の凛も今と変わらず元気な子だつた。ある日、A棟で遊び飽きた凛は、退屈しのぎにC棟に行つた。

C棟には見たことの無い子供達が沢山いた。子供達が元気に遊ぶ中で、部屋の角にじーっとしている女の子がいた。凛は彼女に少し興味が出てきて、話し掛けた。

…頬を赤らめただけで、無反応。

気になつた凛が先生に聞くと、彼女が極度の照れ屋だということがわかつた。

話す 無反応 話す 無反応…

これを繰り返していた。

自分に自信が無いなら、自分を隠せば良い。そう思つた凛は先生からメイク道具をパクリ、持つていつた。

そして、先生の見よう見まねで彼女にメイクを施した。すると、

「いつも…ありがと…」

うつむいたまままでそう言つてくれた。

それが嬉しくて、メイクの勉強をした（先生を盗み見ていた）。

彼女とはどんどん仲良くなつていつたが、名前は聞かなかつた。  
名前が無い子も珍しくないからだ。

初めて会つた日から3週間…

前触れも無く孤児院が潰れた。理由は未だよくわからない。

孤児達は離れ離れになつた。凜は彼女を探したが、もつこ棟どころか孤児院に彼女の姿は無かつた。

凜が小学3年生の時の出来事だつた。

優しい河川敷のおっちゃん達、つまりホームレスに世話をしてくれた  
い、13歳になつた。

反抗期が訪れ、凜はおっちゃんA～Gの元を去り、この森にたどり着いた。

おっちゃん達が、自分のテントの布を交互に縫つて作ってくれた  
七色のテントを張り、自給自足の生活を始めた。

これが、全ての始まりである。

テルが来たのはその半年後。最初は彼女かと思ったが、声優とい  
う夢で違つと思つた。

仲間が増えるのは、まだ先の話だ…

# 第一章 (4) 物語はじめから…… (後書き)

やがて、同郷の一少年、一郎の名前で、アーヴィング・ターナーである。

一 話おきに回想してます。でも懲りない。それがカルタクオリティ

「アサヒトシ、人の壇あとかねやつたー!!

小雨が霧のように降っていた。

今日は雨天活動中止…にはならなかつた。

縁テントの中、全員集合している。そして皆テントの真ん中辺りに注目している。視線の先には…第一の迷い人（女）。

何故こんな状況になつたかといふと、時は3時間前、午前8時にさかのぼる…

今日は雨。さすがに奴等も大人しく…

「…たのもーつ！」 「ペコリッ」

ならなかつた。逆に元気がいつもの3割増だ。寝起きの頭じやついていけない。

輝のメイクを進めながら凜が叫ぶ。

「駄弁るぞー！」

「おーーーー！」

「…おーーーー！」

やつと頭が回り始めた。【wi dowsの起動音】

「今日の輝の設定は？」

先日のハンターモードが脳裏に浮かんだ。

「安心せえ。普通の女子高生や。」

「今日は大丈夫だよ！この前は」「メンね。遊、仁。」

「よつしゃあ！駄弁るぜ！」

「仁、いきなりどうした！？」

出会つた頃の、のんびりとした彼はもういない。確かに今の輝は可愛いが…

「よつしゃあ！俺も駄弁るぜ！」

…元気に言つてみたが、内容は不健康極まりない。

「おいそこのアホ共。少しさ落ち着かんかい（怒）」

「すいませんでした！」

凄い剣幕だつた。関西弁で怖さプラス！

「そうだよ、特に仁。今日は唯一特技を見せてない仁の絵を見せる為に集まつたんだよ？」

「仁の絵？」

「そういえば絵師志望だつて。

「そうだよー。見たい？」

「いや、別に」

「そんなに即答しなくても！」

「『見たい？』なんて聞いた仁が悪い。そんなん特に見たくもないに決まつとるやん。」

「私も今のは仁が悪いと思つ。」

「最近、僕アウエイ過ぎない！？」

「「「だつて、仁だもん」」

「う、うわあああ（泣）」

さすがに可哀想になつてきた。

「仁、早く絵見せろ。」

「あれだけイジッといて！？何、ホントは見たいの？」

「いや、同情しただけ」

「もう、それでいいや…」

そして5分後：

「チツ、うまい…！！」

大雑把な筆使いだが、ポイントはしつかりおさえている。

「オタクに誉められるのは嬉しいなー。」

グサツ【効果は抜群だーつ！】

改めて人にオタクと呼ばれると傷つく。仕返しのつもりだらうか？

「確かにうまいですね。でも服のシワが多くすぎるかな？ココとコ

「は省いた方が良いと思うよ。」

言われてみれば確かに……つてあれ？今の声、誰のだ？

皆一斉に後ろを向く。そこにいたのは…女の子？

短めの茶髪、死んでいる目。オーラでわかるが、俺と同種族だ！

「ん？ どうしたの監して私を見て。見とれた？」

「うわあ、ウゼン。

「誰やねんアンタ？」

「凛は全く動じない。

「私？ 私は尾西実夏。知らないとは言わせないよ、そこの君！」

ビシイツと俺を指差す実夏。

「俺つすか？」

知り合いにこんな奴いたかな？ ん、でもなんか見覚えが……

「全員初対面だがな！」

…「コイツのウザヤ、計り知れねえ。

「ミカ。家、親は？」

凛が聞く。この質問はまさか…スカトアタック！

「家には帰りたくない！ あと『飯をください。』

…『無い』じゃなくて『帰りたくない』か。凛はどうするんだろう

（？）

「飯とテントをやるから一緒に暮らせへん？」

特に変わらなかつた。

「お前のスカウト基準は親と家の有無だけか！？」

「来る者拒まず、出していく者は…。それがウチの、忍道や…」

「ナ…ト…？ あと出でていく者は何…？」

「早、く…『飯…』

バタリツ

実夏は予想以上に弱ってたらしく、力尽きた。

そして、今に至る…

「カツ丼！」

見事にメニューを当てながら起きた。

凛はカツ丼を差し出しながら自己紹介する。

「おはようさん。ウチは難波凛。夢はメイクアップアーティスト

や…みろしく…」

「ぼくは久原仁。夢は絵師。よろしく…。」

「私は黄田輝。夢は声優。着替えてメイクすると性格が変わる照  
れ屋さんです。」

「俺は木々乃遊。夢なし。オタク。」

「俺だけ夢無し！…惨めだ（泣）

「…ゴックン。名は名乗つた。特徴、木々乃に同じ。」

「これは…自己紹介と呼べるのか？

「これからよろしく。特に遊！」

「ん？ああ、オタク同士仲良くなれる？」

「アンタには、負けない！！！」

「えっ、俺、敵扱い？」

「他の皆は仲良くしよ～！」

「「「イエ～！！」」

なんだ、この疎外感？

空を仰ぐ。涙がこぼれないように…

こうして、またここに住人へんじんが増えた。

## 第三章 （1） 新入り 要謹（後書き）

いつもカルタです。

なんと、ここにきて新キャラ登場です。

実夏がどんな過去を抱えているのか、お楽しみに！！

と、自分でハードル上げといて、勝手に萎えてるカルタでした。

## 第二章 (2) 待ち望んだ再会

今は午後3時。

カツ丼を食べ終えた実夏は「眠い」と言い残し、気を失っている間に用意されていたテントに入った。

「そうだ、後で家に連絡とかなきや。」

氣を紛らわせるためにそう咳いてみた。

胸の鼓動がいつもより早い。まさか、あの人気がこんな所にいるなんて…

名乗つても氣付かなかつたことにイラッとしたが、同時に恥ずかしくなつて誤魔化してしまつた。

5年前、私は遊が隣にいる。ただそれだけで幸せだつた。遊に密かな恋心を抱いていた。

しかしあの事故の時、私はショックで、一番辛かつたはずの遊に何もしてあげられなかつた。

一番近くに居たのは私なのに…

ずっとずっと、好きだつたはずなのに…

今更、遊に会わす顔など無い。今も後悔している。

遊が引き込もつてから、頻繁に遊の親戚に様子を聞いた。いつ学校に来ても話が出来るようになつた。せめてもの償いだつた…

…まあ、そのせいで私もオタクになつた訳だけね。

結局、高校生になつても遊は学校に来なかつた。

最近は受験で忙しく、遊の様子を聞いていなかつた。

なので今日の朝、1ヶ月ぶりに遊の家を訪れた。何故か差し押さえられていたけど…

きつと近くにいるはず！そう思つて、雨の中で近所を探し回つた。

商店街、駅前、学校。探しても見付からない。最後に公園に行つた。

でも、やはり居ない。

時刻は8時半。かれこれ1時間以上探ししている。

一度家に帰る?と思い、ベンチから立ち上ると…

「…イジ…」

「イヤ…」

森の中から何か聞こえた気がした。

その声の方向に走つてみる。うつそつとした森の中、木を避けながら走り続ける。

突如視界が開けた。そこにあつたのは…

- 1・青テント
- 2・赤テント
- 3・緑テント
- 4・虹テント

…ツツコミみたい気持ちでいっぱいだ。虹テントなんて初めて見た。だが、そんな気持ちは緑テントから聞こえる声にかき消された。何人かの笑い声が緑テントから聞こえてきた。

覗いてみると…遊らしき人がいた。まだ面影は残つている。やはり目の前にいるとなると緊張する。胸が高鳴る。私の初恋の続きが始まった。

こつそりテントに入り、今に至る…

## 第三章 (2) 待ち望んだ再会（後書き）

毎度ながらカルタです。

そして、毎度ながら回想です。

文章力の無さを痛感しながらも、なんとか半分投稿し終わりました。  
ここまで読んで下さった方に感謝を。そして、これからも宜しくお願ひします！

## 第四章 （1）失踪 旅立ち

昨日の雨のせいでもかるんだ地…

「コウ！緊急事態や！」

天気の描写すらさせてくれなかつた。

入ってきた凛の方を見ると、輝、実夏、……あれ？仁がない。

「仁が出ていつてしもた！」

なん…だと…！？

で、でも！出でいく理由に心当たりなんて俺には無…

「これで3回目や」

「イツらにはありそうだ。

「何で仁が出ていつたかわからないんだが…」

凛は目を背け、深刻そうに言つた。

「……地味やねん」

「は？」

「絵なんていう滅多に使わん特技やから、目立てへんねん！」

「それだけで！？それに仁が目立たないなんて、そんな…」

「確かに。新入りの私よりキャラ薄いです。」

「ゴメン、仁。否定する言葉が思い付かないよ。

「というわけで、今日の活動は仁の捜索及び励ましや！テル、今日の設定は『探偵』な」

「コクコクッ」

力強く頷く姿はとても可愛かつた。

10分後：

「私は高校生探偵・黄田輝。幼なじみのも（「」）  
変な人が出てきた。いや元々変だが…  
設定、『 ナン君』 の間違いでは？

「ウチは、なにわの高校生探偵・難波凜。テルの戦友や…」

…黙れ江戸っ子。

「そして私は尾西博士だ！」

くそつ、俺一人じや捌ききれねえ！

「「「仁よ。私達からは逃げられないぜ！」」

ここまで俺がまともに見える状況も珍しい。敢えて思いつきりス

ルーして訪ねる。

「で、どうやつて探すんだ？」

「手分けして適当に探せ！どつせその辺にある筈やー。」

「仁の扱い酷すぎるだろ！」「

仁が出て行くのもわかる気がする。

…それから地道な搜索を進めるが見つかる訳もなく、いつの間にか日が暮れて、全員テントに戻つて来ていた。

「畜生！仁の奴、どこにおんねん！前はすぐ見つかったのに…」

ふざけていても、何だかんだ仲間思いの凜は本気で心配している。

「仁の前みたいに、その辺に転がつとつたら即回収できるんやけど…」

仲間思い…なんだよな？

「もしかしたら、地味とは別の理由なのかも。」

…！？素の輝が珍しくはつきり喋つた！

「だつたら何で…」

凜が言いかけたところで、

「ただいまー…」

なんと、探しでも見つからなかつた仁が帰つて來た！

「仁！心配したんやで！どこ行つて…」

「ゴメン。大事な…用が、あつたから。」

歯切れが悪い。どうしたのだろう？

「…大事な用？」「…」

「実は……夢が叶つた。」

「「「「……っ」「」「」」

唐突にそういう告げられ、皆言葉を失う。

「実は、電 イラスト大賞に絵を送つてたんだ。そしたら受賞して、新人作家が気に入ってくれて……」

「でも、まだここで一緒に……」

「無理なんだ。その人の職場なんだけど、かなり遠くて……」か  
らじや通えない。」

「そんな……」「グスツ」

凜と輝は今にも泣きそうだ。

「発売したら教える。金稼いででも買つてやる。」

実夏とハモつたが気にならない。

「ありがとう遊、実夏。名残惜しくなる前に行くね。皆、元気で

……

「ちよつと待て、仁。1つだけ答えて行き。」

凜が震えた声で仁を呼び止める。

「……」

「兄貴は、見つかったんか？」

「……うん。」

「……ならよし。言つ」とはあらへん。」

「今までありがとうございました、凜。世話になつた。じゃあね……」

そう言い残して行つてしまつた。

その背中は俺には眩しそぎて……ただ、呆然と見送る」としか出来なかつた。

## 第四章　（1）　失踪　旅立ち（後書き）

といつわけで第四章です！

仁君が行つてしましました。これをきっかけに、皆自分の過去と向かい合っていきます。

次回、お楽しみに～！！

## 第四章 (2) 檻との別れ（前書き）

さあ、物語もクライマックス間近！  
サブタイトルの「檻」ですが「しがらみ」と読みます。頭の悪い力  
ルタさんは読めなかつたので。

## 第四章 (2) 櫃との別れ

その日は、その場で解散となつた。

縁テントの中、遊は「の後ろ姿を思い出していた。

「夢、か…」

### 夢

未だ、心に鍵をかけていた遊には眩し過ぎるものだつた。

そう…今まで本当に心を開いた人は3人

両親と、あとは…

「入るよ」

実夏だつた。

寂しそうな顔をしている。

「何考えてたの？」

「仁について…」

「ふーん。本当に、それだけ？」

俺の心を覗いたかのような質問に、ドキッとした。  
実夏はまっすぐ俺の目を見ている。

誤魔化せそうにない。正直に言つことにした。

「…なあ、実夏。夢つて、何なんだろうな?」

「夢?」

「そう、夢…」

「…」

「俺は昔、両親を俺と友達の目の前で亡くした。」

「…」

「友達にショックを『えた責任。親を助けられなかつた責任。その責任に押し潰されそうで、心を閉ざし、逃げ続けた。』  
「…うん」

「そんな俺が、夢を追つていいいのかな？逃げながらでも、夢を追つていいのかな？」

「駄目ですよ。」

即答された。でも当たり前の答え…

「だから…逃げないで。」

「えつ…」

予想外の言葉に戸惑った。

「私の昔話も聞いてくれる？」

「…」

「昔、友達の親が目の前で事故死したの。どしゃ降りの日だった

…」「おい、まさか…」

「ショックだったわ。でも1番の友達が苦しんでる時、何もできなかつた…」

「…」

「ゴメン。私も、責任を感じてたの。」

「実夏だったのか…」

すつかり忘れてた。

「俺の方こそ、ゴメン。あの日、一緒に帰らなければ…」

バチンッ

「あだつ！」

デコピン（威力大）が俺のデコに炸裂する。

「お互い責任感じてんだから、おあいこでしょ？」

「あ、ああ…」

「それに、私はあの時遊と帰れて嬉しかった。だから謝んないで

！」

「そうか…」

どうしよう。顔がめっちゃ熱い！

「お、それがいい……」

赤面しながら実夏が言つた。

「…」も少しマトモな趣味を持って〜〜つづけます。

訂正、実夏が叫んだ。

「お前モフタケタ?!」

に興味を含むかたがいるのなら、たのむ

「ウニ！」

再び顔が熱くなる。

「親とか友達とかに変な目で見られたんだんだからね！？」

「実夏、お前…」

「なつ、何よ？」

「ストーカー？」

引きこもっていた俺の趣味を知っているなんて…

「心配して、アリタの親戚に聞いていたのは。それで彼が、スナ

心酔して

「ちよつ、実夏? 何で拳を固めてるんだ? オイ待て早まるな!」

「悪質な変態と一緒にしないでよっ!」

「ぐわつ」

意外と強かつた

それから休憩を挟み、午後11時頃

「話を戻そつか」

体温が一気に下がる。

夢見たものいいたよ!」「

俺が出した結論は

「俺なんかより、アイツらが先だろ?」

赤テント、虹テントの方を見る。

「…やつね。一緒に脚本を押してあげましょ、うーー。」

「おうー。」

いつの間にか、俺の心を閉ざしていた鍵は崩れ落ちていた。

## 第四章 (2) 標との恋れ（後書き）

あとがきで書くこと無くて困つてるカルタです。

「遊君、仲良かつた女の子の名前くらい覚えとけよ。ヒコツカーネー<sup>ト</sup>ー<sup>ト</sup>言つてる割には何気リア充じゃねえか！」

と、キャラに嫉妬しつつ、あとがき終わります！！

## 第四章　（3）　再会は突然に……

次の日は夏と間違つぽじ暑かつた。

午前9時半、テント近くの木陰で皆が集まっていた。といふか俺達が凛と輝を呼び出していた。もちろん仁の姿は無い。

「何の用や、コウ、ミカ？」

「お前らは、仁を見てどう思つた？」

俺と実夏は、昨日の話を行動に移そつとしていた。

「羨ましかつた。夢が叶うなんて……」

「そうじやない。質問が悪かつた。言い直す。」

「……？」

凛と輝が首をかしげている。

「お前らは仁を見て、これからビリシヨウと思つた？」

「これからも頑張るつと……」

「これまで頑張つっていたのか？」

「当たり前やろー」「コクコクッ！」

「本当に？」

「……どうじう意味や？」

かなり怒つてるようだ。声にドスが利いている。

「サボつてたんじやねえかつて意味だ。居心地の良いくらいに呑むために。」

「そんなことつ……」

「無かつたのか？」

「……」

流石の凛も黙る。

ここに居る人に言つてはいけない言葉。それを、俺は迷いなく言い放つた。

まあ、一ートの俺が言えた事じやないんだが……

「責めるつもりはないの。私達にその資格はないし。」

全くもってその通りだ。

「私達は2人にも夢を叶えて欲しいだけ。」

「俺達にできる事があれば言つて欲しい。協力は惜しまん。」

「なんでいきなり…」

「約束したからな…」

「イツらとの出会いを思い出しながら、凛に向つ。

「飯とテントはもらつた。だからお前らが暇じやなくなるよ！」

「夢を叶える手伝いをしてやる！」

「…………コウ、よく覚えてたな？」

「いや覚えてるよ。1週間くらいしか経つてないもん。」

「アンタが1週間前の事を覚えてるなんて…」

「そこまで馬鹿じやねえよ…」

「えつ、マジで？」

「オイ、凛はともかく何故に実夏までも…。なあ輝？」

「…………ブイッ」

「目をそらすなーっ！」

皆から評価は『俺=馬鹿』のようだ。

……話がそれすぎたな。

「話を戻そう。」

「あつ逃げた。」

「お前らうるせえよ…。今は本題それじゃねえだろ…」

「…………はあ～」

気にしないことにする。

「出来るこいつて言つても大した事できないから…」

「所詮ユウやしな。生きるのに精一杯や。」

否定はできない

「何でそれが夢になつたかを聞かせてくれないか？」

「孤児院におつた女の子によつメイクしどつたから、以上終わり。」

「はやつ…」

「

もう少し話すの渋ると思っていたから拍子抜けした。

「輝にも今初めて喋った。」

「その割にはあつさりと喋ったな！」

「……凜、孤児院の名前は？」

輝が話に入ってきた。顔付きは真剣だ。

「確か数年前に潰れた……」

「ゴクリ

「マ ラタウンやつたかな？」

「「それは絶対違うと思つ……」「

相変わらずのポケン好き。実夏も同時にシシコんでいた。

「やつぱり凜はあの時の……」

「「通じたつ！？」

輝がハキハキ喋っているが、今はそれよりマサタウンだ。

「どういう意味や、テル？」

「榎本孤児院、通称 サラタウン。ポケモ好きで、フ老人を名乗る榎本さんが院長。」

色々と残念な人だ。

「いや、詳しい事は覚えてへんねん。」

「A棟～C棟まであつて私はC棟にいた。覚えてるよね、A棟のマイクさん？」

「じゃあテルがあの時の……」

「うん」

「何で声優を目指そうって思ったん？」

「面と向かって話すの苦手だから……。アニメを通してでも私の声を届けたかったの。凜は？」

「ウチは、マイクしどったら何時かアンタに会えると思ってな。もつと一緒に楽しく過ごす。それがウチのホントの夢や。」

「楽しく過ごすって、何か小学生の頃の俺みたぐはっ！」

「過去についてのモヤモヤが、一気にのうなったわ。」

「私も

「輝、ウチを役作りのための専属のメイクさんとして雇ってくれ。一緒に頑張ろう！」

「うんっ！」

その後また一人、ここを去っていった。  
残るはあと二人。しかし、彼らの進む道はもう決まっていた。

## 第四章 (3) 再会は突然に…… (後書き)

カルタです。

とうとう森からホームレス達がいなくなりました。

次回、最終話です。お楽しみに～！～

## エピローグ 旅立ちの先へ……（前書き）

遂にエピローグです！

ありきたりな終わり方な気もしますが、楽しんで頂けたら幸いです。

## Hプローグ 旅立ちの先に……

あの森から、ホームレス達が出ていつてから10年もの月日が流れた。

あの後、俺と実夏は某アニメーション学院に入学。今はアニメ製作会社に勤めている。

一人で一人前扱い。そして、初めて監督を任された。普通ならあり得ないが、クビをかけて頼み込んだ。

「遊う、大丈夫？ここクビになつたら行くところによ？」

「こんなチャンスは滅多にないんだ。やるしかないだろ？」

「確かにね。」

実夏は苦笑混じりに答える。

「原作の絵師にアニメの方も頼んで、断られ続けてて……その絵師が仁なんてね。」

「声優も、付き人の気分で性格が変わつて面倒くさいからつて、何人か交渉を諦めた……輝と凜。」

「…………はあああ～～～」

一人して大きな溜息をつき、

「…………あいつら大人になつても迷惑だな……」

仲良くハモる俺達。だが、溜息と同時に笑みがこぼれる。

「実夏、まだアイツらの耐性ついてるか？」

「そう簡単には消えないわよ。」

「よし！それじゃあ……ひと仕事してくるか！」

「うん！」

ホームレス達の物語は終わつたが、俺達の物語はまだまだ続く。

## ハピローグ 旅立ちの先に……（後書き）

結局は、夢を叶えてからも楽しく過ごしていく遊達なのでした！いかがでしたか？意見、感想を頂けたら幸いです。ここまでお付き合い頂いた皆様に心からの感謝を！！

以上カルタでした～！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6241m/>

---

ホームレス達のいるところっ!!

2011年5月18日09時30分発行